

素 顔 拝 見



口腔生命福祉学科福祉学講座・准教授

中 村 健

私の好きなモノ

夏は黒埼茶豆で乾杯！

2020年4月、新潟市役所の福祉畑から転職し准教授を拝命しました。黒埼町生まれ黒埼町育ちの中村と申します。

私には二つの好きなモノがあります。ひとつは「生活保護の仕事」、ひとつは「ビール」、このうち前者の話を中心にお伝えしたいと思います。

1975年（昭和50年）生まれ、いわゆる就職氷河期世代にあたります。若い人にはジャンプ・ファミコン世代と言った方がなじみやすいでしょうか。ドラクエはロト3部作、ガンダムは宇宙世紀がドンピシャです。小学生から高校生にかけて、野球部・器械体操部・バレーボール部に所属しましたが、運動神経が良いわけでもなく大層な成績は残せませんでした。雪国新潟ということで、スキーは物心つく前から始めており、20代の頃は八海山のコブ斜面を楽しめていましたが、30歳の時にハーフパイプで右大腿骨を折ってしまい、数年の自粛期間を経て現在は年1回子どもと一緒に整地を楽しむ程度です。性格は楽道家・お調子者・八方美人だと自認しています。

1998年3月、本学経済学部を卒業しました。成績は良くありませんでした。単位を落とした科目もいくつかありました。唯一満点を取れた科目が社会保障であったのは、その後の私の人生を暗示していたのかもしれない。

大学卒業し、地方公務員となりました。恥ずかしながら、初めて福祉事務所勤務（ケースワ

カー）を命じられた時は「せいほ？生命保険ですか？」と質問してしまうほど、社会福祉に関する知識も技術も持ち合わせていませんでした。

配属された新潟市福祉事務所では、2020年3月をもって退職された中川兼人准教授と机を並べて業務にあたっていた時期もありました。多くの同僚たちが生活保護業務を「ストレスがたまる」「不人気職場」「早く異動したい」と否定的に捉えていました。私は「頼られることが嬉しい」「感謝されることが多い」「家庭訪問の時間が楽しい」「スケジュールが立てやすく休みを取りやすい」と肯定的に捉えており、やりがいも感じていました。

福祉事務所勤務4年目の2006年度、新潟市役所は福祉専門職（ソーシャルワーカー）の採用を始めました。同年4月、6名の若きソーシャルワーカーが入庁し、うち2名が福祉事務所へ配属されました。この二人の若者との出会いが私の人生の大きな転機となりました。50名ほどいるケースワーカーの中から、教育係に抜擢された私は、これからの福祉行政を背負って立つ人材の育成を任されたことに喜びを感じながら、業務を丁寧に教えていました。そんなある日、この二人が発した言葉に私は大きなショックを受けました。

「こんなところは福祉事務所じゃない」「いつ仕事を辞めようかと悩んでいる」

私を含め福祉事務所の先輩職員の多くが、“何の専門性も持たない”ばかりか“生活保護利用者に対して偏見や差別の眼差しを向けている”ことを見抜いていたのです。ダイヤの原石を“磨く”どころか、私たちの存在自体が原石を“ススまみれ”にしていたと、深く反省するに至りました。そして二人から言われたもう一つの言葉で、業務に対する価値観が大きく変わりました。

「生活保護利用者の中には不合理な言動をする人もいるけど、嫌だと思えない、人生のどこかでそういう生き方を選択するしかなかったんだと思

う、生まれたときは誰だって純真無垢なのだから…、だから私はどんな人にも寄り添いたい！」

その数年後、高橋英樹教授が講師を務めていた研修会で耳にした「ソーシャルワークの肝は、共感したい人にいかに共感できるか」との教えにつながるものでした。

この新人ソーシャルワーカーとの出会いをきっかけに「希望を持った若者に二度とこのような悲しい思いをさせてはいけない」「福祉事務所の雰囲気を変えたい」「まずは自分が変わるために、しっかり学ぼう」と強く決意しました。

多くの研修会やセミナーへ参加し、他機関の専門職とつながりを持ち、知識の習得と多様な価値観に触れたことで、ソーシャルワークへの興味が加速的に増していきました。多くある出会いの中には、漫画家柏木ハルコさんとの出会いもありました。柏木さんは2014年からビッグコミックスピリッツで新人ケースワーカー奮闘記「健康で文化的な最低限度の生活」を連載しています。2012年以降、毎年お会いする機会があり、私のエピソードや支援手法を劇中で使用していただくこともありました。莫大な取材に基づくリアリティあふれる内容で「第64回小学館漫画賞」を受賞、厚生労働省主催のケースワーカー研修でも使用されるなど教材としても高く評価されています。2018年には吉岡里帆さん主演でテレビドラマ化もされました（共演は井浦新さん、田中圭さん、山田裕貴さん、川栄李奈さんなど）。続編に期待したいです。

多くの学びと出会いを経た私は、他のケースワーカーたちが「困難ケース」と呼び嫌がる世帯の支援に面白さとやりがいを感じるようになり「中村変わっているね」を誉め言葉と受け取るようになります。“類は友を呼ぶ”とはよく言ったもので「ゴミ屋敷の支援は楽しい！困難ケース大好き！」と豪語する他機関のソーシャルワーカー達と出会い意気投合し、チーム支援を楽しみました。仲間が出来れば当然「反省会やろう！」と頻りにアルコールを伴う懇親会を開催する訳です。

私のもうひとつの好きなモノ「ビール」の話です。

宴会では「ビールがあれば何もいらぬ」「ビールがなければ生きていけない」が口癖です。特にクラフトビールの魅力にはまっています。現在はスーパーやコンビニでも手軽に手に入れることが出来、良い時代になりました。2018年にビール仲間と「よなよなエール」公式ビアレストラン「よなよなビアワークス」へ行きましたが、ビールも料理も格別のうまさでした。また行きたいお店です。

最後に抱負を述べて締めくくります。

ダイヤの原石である学生達が将来、要支援者のよき理解者となり福祉の増進に熱意を持ち続ける人材となるよう育成に尽力したい。私自身も常に研鑽に努め、調査研究に勤しみ、社会福祉における課題解決に取り組める人材になりたい。そして、今ある人的資産を守り、増やし、必要とされる場面では惜しみなく尽力し、私のために力を貸してくれる仲間を支えられながら、職務にまい進したい。

最高の乾杯のために。



健康で文化的な最低限度の生活





微生物感染症学分野・助教

平山 悟

本年4月1日より微生物感染症学分野の助教に着任致しました、平山悟（ひらやまさとる）と申します。この度、素顔拝見のお話をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

私は横浜で育ちました（時に疎ましく思われがちですが、自信と誇りを持って横浜出身と言っています）。電車の中でも騒がないような、大人しい子供だったと聞いています。近所のスケート場に遊びに出かけたことをきっかけに、5歳からフィギュアスケートを習い始めました。熱心に打ち込んだりそうでもなかったりしながら、15年間続けました。現役時代はもう少し細身の骨格をしていましたが、スケートをやめてから体型が変わり、水泳やってた？バスケやってた？と今ではよく聞かれます。そして寒さにすっかり弱くなりました…。この春に東京から越してきたばかりで、まだ新潟の冬を知らないなので、雪や寒さが心配です。

高校まで横浜で過ごした後、藤沢市の日本大学生物資源科学部（農学部に近いです）に入学しました。湘南の江ノ島に近く、ビーチバレーサークルがあったり、サーフィンしてから授業に来る学生がいたりしました。二十歳でスケートをやめると、これまでできなかったアルバイトをしてみたり（イタリアン居酒屋のホールスタッフでした）、

サクスを習ってみたり（音を出せたらほぼ満足しました）していました。また、環境問題に関わる活動がしたいと思い立ち、アースデイ東京というイベントのボランティア活動に参加しました。ピースフルな雰囲気や、年齢も職業も関係なくフレンドリーに接する仲間が心地よくて、この活動は10年続けることになりました（始めるより、やめることに勇気がいるタイプです…）。

一方、大学4年生からは食品微生物学の研究室に所属しました。そこでは、鹿児島に伝わる福山酢（壺で造る米酢）の発酵に関わる乳酸菌と酵母の相互作用について研究していました。壺に原料を入れて屋外に置くだけで、自然に発酵や熟成が進行する福山酢の原始的な製法は、とても興味深いものでした。この研究を続けながら大学院に進学し、学位を取得しました。

その後、東京の国立感染症研究所に勤め、口腔細菌を扱うようになりました。細菌が放出するメンブレンベシクルと呼ばれるナノサイズの膜小胞をテーマに、歯周病原細菌のベシクルをワクチン抗原に応用したり、ベシクル形成を高速原子間力顕微鏡で観察したり、ベシクル産生量の増大方法を見出したりしてきました。

ところで、現在の趣味はライブ（去年は60公演観ました）とラジオ（週に20番組チェックします）です。陽キャなのか陰キャなのか分からない趣味ですし、歯科医師免許を持たない私ですが、だからこそ別の視点から物事を捉えながら、価値ある研究成果を発表できるよう、また教育活動に貢献できるよう精進致します。今後ともよろしくご厚意申し上げます。